Japanese Journal of Applied Psychology
2006, Vol. 32, No. 2, 92-94

追　悼

花沢成一先生を偲んで

聖徳大学　井上僖久和

花沢成一先生

平成18年10月3日に享年76歳でご逝去なされました花沢成一先生に対しまして，この場をお借りして深く哀悼の意を表しますとともに，心よりご冥福をお祈りいたします。

花沢先生がお亡くなりになりましたという知らせをいただいた時，何ということが……しばし茫然自失しました。日頃，体調の悪さなどとは無縁で，日々お元気にされている姿を身近で拝見していただけに，驚きは隠せませんでした。

お亡くなりになる数日前，東京での臨床心理士指定養成大学院連絡会議において監査役を果たされ，元気なお声で壇上からご挨拶申し上げていたことを思うと信じがたく，痛恨哀惜の念に耐え難いものがあります。

先生はお亡くなりになる当日，聖徳大学へ出校するということで，いつもと変わりなくご自宅を出られたのですが，途中で気分が悪いということで，昼過ぎ家に戻られ，奥様に自室で横になるからと告げられてお休みになっている時に，突然の心臓発作に見舞われ，息を引き取られたとのことでした。突然にみまかれた先生の奥様をはじめご家族の悲しみとお嘆きはいかばかりかとお察しする次第であります。

花沢先生は昭和5年1月18日，千葉県長生郡長柄村山根という緑に包まれた田園地帯でお生まれになり，四季折々の自然のなかでこころ豊かな少年として育ってきました。

日本大学には旧制予科文科から日本大学文学部心理学科（新制）に進まれ，昭和31年に同学科を卒業されました。学生時代は児童心理への関心から地域の小中学校におもむき集団知能検査や性格検査などを実施され，児童・生徒や教員との交流を深められたとのことでした。何事にも積極的に取り組んでいこうとする先生の原点みたいなものが感じられます。

大学卒業後は，非行少年の矯正教育を行う八街少年院に就職なされ，院生の文芸誌の編集を担当したり，全院生の身の回りを管理する用度係をしたりして少年院教官としての職務にあたってきました。しかし，少年非行をより深く研究するには大学院の方がいいのではないかとの思いから少年院を退職して，日本大学文学研究科心理学専攻修士課程に進学され，昭和37年に同博士課程を満期退学なされました。

大学院時代は勉学に勤しむかたわら，NUPAS (Hihon University Department of Psychology Alpine Society) の隊長として，関東近隣の山歩きを通して，同じ心理学を学ぶ仲間として，先輩後輩の垣根をはずした交流の促進等，人間関係の構築の大切さを実践なさっておりました。

日本大学では，昭和35年に文理学部助手になられ，専任講師，助教授を経て昭和51年に教授になられました。この間学生相談専門委員会委員，大学院文学研究科分化委員会委員をはじめ，心理学料長を歴任するなど心理学研究室にはなくてはならぬ存在として多くの業績を残してまいりました。また，日本家族心理学会をはじめ日本心理臨床学会等の年次大会ではその大会委員長としての重責を果たされてこられました。

先生は平成12年1月に定年退職され，同年4月に聖徳大学人文学部児童学科教授に就任なされ，その後同大学人文学部臨床心理学科長，心理学科長，心理教育相談所長などをお務めになられました。

先生の心理学に対する旺盛なエネルギーは，さまざまな学会にわたる先生のご経歴でも明らかにされているとおり，日本心理学会，日本応用心理学会，日本教育心理学会，日本心理臨床学会，日本臨床心理士資格認定協会，日本催眠医学心理学会，日本犯罪心理学会，日本心身医学会，日本母性衛生学会，日本行動療法学会，日本家族心理学会，日本女性心身医学会等において，理事や常任理事，評議員，名誉会員等々と本当に幅広い活躍をなされておりました。

先生が本学会の正会員になられたのは昭和35年で，今日に至るまでの本学会のために大きな貢献をしていただきましたが，その業績をたたえられて平成12年には名誉会員に推されました。本学会の分野は，教育，産業，組織，臨床，医療，看護，社会，情報処理，福祉等大変幅広いものとなっています。先生の学問への旺盛な情念がさまざまな領域を越えて幅広い研究につながっていったのではないかと思います。

先生の専門分野は，臨床心理学をはじめ親性（父性・母性）の発達，妊産婦の心理療法，催眠療法，自立訓練法，少年非行の研究等であります。とりわけ母性心理学に関してはこの領域の開拓者として数多くの研究実績を残されており，日本における重鎮的役割を果たしてまいりました。平成2年には「母性発達の心理学的研究」で日本大学から文学博士の学位が贈られました。その後母性心理学の重要性が認識されるにつれて，東京大学をはじめ東邦大学，山梨医科大学，埼玉県立衛生短期大学等において非常勤講師として母性心理学を講義なされるようになりました。なお，この功績によりまして，平成10年には日本母性衛生学会から学術奨励賞を授与されました。今日でも修士論文指導において先生が作成なされました対児感情尺度や親性等母性心理学に関する問い合わせが数多く寄せられている状況であります。

聖徳大学及び大学院の授業では心理検査法，母性心理学特論，臨床心理査定演習，児童臨床教育学特論等を教えておられました。豊かな経験に裏打ちされた研究者としてあくなき探求心と教育者としての人間教育の情熱は多くの学生に慕われていました。

聖徳大学に移られた時，かつての恩師，古賀行義教授から「君は女子大学の先生が似合っていると思うよ」といわれたことがあり，憧れの女子大学に来れたとお話になっていたことがありました。女子教育の大切さを認識されながら，先生は心理学を通して社会に役立つ人材の育成を常に心がけておられ，日常においても学生との交流を積極的に行い，キャンパスをはじめ，学外研修等にも参加して優しいまなざしで気軽に声をかけ，励まして学生と接しているお姿は今でも強く印象に残っています。

先生はまた，心理臨床の実践家として地域の児童福祉施設や病院，クリニック等において数多くの面接や心理治療をなされておりましたが，その経験を見識を乞われて日本オリンピック委員会や日本スケート連盟からの要請で，昭和63年には日本スケート連盟フィギュアスケート強化スタッフ・スポーツカウンセラーになられ，平成6年日本スケート連盟長野対策本部選手強化委員会強化スタッフ，長野オリンピック冬期競技大会ショートトラックスピード競技役員，日本オリンピック委員会強化スタッフ（医・科学スタッフ）を歴任されて，スケート選手のよきカウンセラーとしてご活躍なさいました。昨年フィギュアスケート世界選手権がカナダのカルガリーで行われた際，先生からのお誘いを受け同行させて頂きましたが，当日，競技に臨む選手たちに気楽にお声をかけておられたのが今でも私の脳裏に深く刻まれております。

私は先生が日本大学の専任講師になられた時，学部時代にいち学生として先生と出会いました。以降研究会

活動や合宿でご一緒することも多く，いつも優しく包んでいただいていたように思います。卒業後は職場が先生のお住居になっている千葉県にあった関係から同窓生のネットワークを作ろうということで，日本大学心理学科千葉県心理会を作り，千葉県に在住もしくは勤務する同窓生が時折集まって交流を深めたりしておりましたが，この発起人の一人が花沢先生でした。人のつながりの重要さを教えていただきました。

教員として大学に入りましてからシラバスや授業展開等について，親身にいろいろとご教授いただきました。感謝の念で一杯です。先生とご一緒に学生とともに箱根や志賀高原に行ったことが懐かしく思われます。

こんにち大学では，少子化時代を迎え受験生の募集や充実した授業をいかに展開するか等さまざまな課題が山積しており，心理学科の発展のため先生のお力になお期待するものが多かっただけに，道なかばで逝かれたことは私たちにとって大変に残念でなりません。

先生のご遺志を継ぎながら，更に心理学の道を探っていきたいと思っています。

私にとって花沢先生はこの上なく大切な恩師であります。先生からいただいたたくさんのご指導，ご厚情に対するお礼の言葉，「先生どうもありがとうございました」そしてどうか安らかにお眠りくださいを今ここに述べさせていただいて，お悔やみの文を終わりたいと思います。